

第一章 七万一、三六八票の記録

たたかいは終わりに近づいていた

いよいよ最終日

「政治に市民常識を！」の合言葉でたたかってきた二十日間の選挙戦も、徐々に終わりに近づいていた。昭和五十一年十二月四日、土曜日。選挙戦の最終日である。朝のうち薄曇りだった天気も、午後、国立駅頭で街頭演説をするころから陽がさしはじめ、ますますの選挙戦最終日となった。

「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」推薦、革新無所属候補菅直人（三十歳）を乗せた選挙カーは、中央線三鷹駅北口の街頭演説を終え、選対一の名ドライバ―小椋一利（三十五歳）の安定した運転で、武蔵野市の閑静な住宅街を東へ、吉祥寺駅北口へと向かっていた。最終日のこの日、「東上作戦」なる特別スケジュールが組まれていた。午後一時、中央線立川駅北口の街頭演説をかわきりに、国立、国分寺、武蔵小金井、武蔵境、三鷹と中央線を東上しつつ、駅頭での街頭演説を繰り返してきたのである。午後六時半、冬の太陽はとくに西の空に没し、服の下に入れたカイロがありがたい時間になっていた。

「一昨年市川房枝さんを参院選にかつぎ出したグループに推されて今回の衆議院議員選挙に立候補した菅直人です」私たちの選挙では、内容の伴わない「連呼」は一切やらない方針になっていた。

選挙カーは、何度も停車を繰り返して、終盤戦のウグイス嬢佐野ゆかり（二十歳）が、一回三十秒から三分位のスポットを流していく。

十月二十三日の「草の根千円パーティー」から、私たちのたたかいは始まった。それから約四十日間、サラリーマン、学生、主婦、OL、学者、教師、その他多くの人間が、運動の仲間に加わってきていた。選挙戦の終盤には、候補者の菅さえ名前も知らないような連中が、電話の応待やハガキの宛名書き、ビラ撒きなどをやっている、という具合になっていた。議論し、決定し、スケジュールをつくり、担当を決め、実行し、反省と検討を加えていく、という毎日であった。決してすべてが予定通りにすすんできたわけではない。むしろ、毎日が予定外のことのくり返しだったといえる。

いい。予想以上にうまくいったこともあれば、どうしてもうまくはこばなかったこともある。しかし、参加した一人ひとりが、それぞれの持ち場で、それぞれに工夫しながら、しんどい毎日を楽しげにこなしていた。この運動（及び運動グループ）を卒論のテーマにし、期間中連日、菅の自宅に泊りこんだ藤岡郁子（二十二歳）の表現を借りれば、「毎日がまるで修学旅行のような」選挙戦であった。

三台の伴走車を引きつれながら、選挙カーは吉



武蔵野市の団地で第一声をあげた。

祥寺駅北口に近づきつつあった。運動の参謀役であり、最終日の街頭演説の司会を担当している片岡勝（三十歳）は、「東上作戦」のしめくり地点、吉祥寺に向かう伴走車の一台を運転しながら、ある種の感慨が心の内に拡がっていくのを感じていた。「終わっちゃうんだな——自分たちが必ずしも十全な力を持ち合わせていたとは思えないが、ともかく十二分に力を出しつくしたという満足感と、状況の歯車を少しでも納得のいく方向に動かしたという確信と、そして一つの運動の終盤にはいつも感じる「なんとなく、ちょっぴり寂しい感じ」とがいきりまじった、不思議な気分であった。一方、候補者の菅は、「東上作戦」の途中から、のどが少しかかれてきたのを感じていた。だが、疲れてはいない。もうひとふんばりだ。

市民運動から政治運動へ

菅が弁理士として特許事務所勤めながら、片岡をはじめとする仲間たちと、住宅問題、食品公害問題、医療問題、企業の政治献金禁止運動など、次々に市民運動を組んできて、もう六年になる。昭和四十九年の参院選には、「金権、企業ぐるみ選挙打倒」を旗じるしに、市川房枝女史をくどきにくどいて、むりやり全国区にかつぎ出し、菅はその選挙事務長をつとめた。

翌五十年の統一地方選では、各地の市民運動グループと連絡をとりつつ、武蔵野市議選に仲間の田中栄（二十八歳）を推し出したが、わずか一票差で惜敗した。そして今回の衆議院選挙である。一つひとつの運動が、自分たちにとってのトレーニングであった。一步一步の前進が、仲間を増やし、グループの力を強めていった。

今回の選挙も、これまでと同じ「地盤・看板・カバン（金）——三バン」なしの「三無選挙」である。まして、この東京七区は、自・社・公・共四党の「指定席」、「無風選挙区」といわれていたところである。序盤戦ではたしかに、人手もカンバもいまひとつ、選挙区内での手応えもほとんど感じとれなかった。

しかし、八万枚のビラ、三万五千通のハガキ、三台の電話での呼びかけ、千七百二十三か所のポスター、マスコミの報道、選挙公報、政見放送、立会演説会、毎朝毎夕の街頭演説、一日平均二十回の街頭演説と百回のスポットなど、一つひとつの運動が着実に積み重なっていく中で、様相は一変していった。

中盤からは、運動員の一人ひとりが、確実な手応えを感じとれるようになった。手伝いを申し出てくれる人、激励の電話をくれる人、立ちどまって演説をきいてくれる人、電車の中で熱心にビラを読んでくれる人、カンパをしてくれる人、事務所をたずねてくれる人……。決して爆発的ではないが、人の輪が日々大きなものになっていくのが感じられた。カンパも十二月二日、ついに目標額の四百五十五万円を突破した。

食品公害問題など、それぞれのテーマを軸に、いろいろな場を通じてたたかいを組んでいく市民運動は、リーグ戦に似ている。一方、選挙は明らかに政治運動である。その意味で、選挙はトーナメント戦に似ている。一つひとつの戦いに確実に勝っていくことが至上命題である。それは状況に対する私たちの責任でもある。

今回の選挙戦に突入する際、候補者菅直人にとって、このトーナメント戦に勝ち残れるかどうか

が最大の関心事であった。もちろん、この場合の「勝つ」は、「当選」だけを意味しない。今回の運動には三通りの結果が考えられた。第一は、運動が大きな拡がりをもち、結果として当選が獲得される場合である。これは、すばらしいことではあるが、その責任の大きさ、その後やるべきことの多き重大さを考えると、身のひきしまる思いがする。第二は、当選は果たしえないが、私たちの運動の趣旨がかなり多くの人に伝わり、共感の輪も大きく拡がり、これまで続けてきた運動をさらに大きなうねりにしていくことができる場合である。そして、何としても避けなければならぬのは第三の、選挙に大敗を喫した場合である。この場合は、これまで着実に石を積んできた運動にも明らかな支障が生じることになる。トーナメント戦に勝ち残るとは、第三の場合を除く、第一、第二の場合を指している。

中盤戦からの急激な盛り上がりを生々しく実感することのできた昔は、吉祥寺に向かう選挙カーに揺られながら、確実にそのトーナメント戦に勝ち残ったことを確信していた。

午後七時、選挙カーは吉祥寺駅北口に到着した。

最後の街頭演説

中央線吉祥寺駅周辺は、この数年間に大きな変貌をとげ、新宿副都心にならって副々都心と呼ばれている。駅前が再開発され、いくつかのデパートが新規出店したほか、ロック文化発祥の地として、若者たちから「ジョージ」という愛称で呼ばれる、活気にあふれた街である。師走の土曜日の午後七時、雑踏する副々都心の駅頭に、選挙カーと三台の伴走車は到着した。ここで一時間にわた

って、選挙戦最後の街頭演説をするのである。

吉祥寺駅北口には、勤め帰りの人たちと、商店街からあふれてくる人々が入りまじり、人の流れの渦をつくっている。一人でも多くの人に立ち止まって欲しい、一人でも多くの人にピラを受けとってもらいたい、一人でも多くの人に耳をかたむけてもらいたい。泣いても笑ってもあと一時間なのだ。

選挙カーと伴走車に分乗してきた十五人の運動員が、近くの商店にあいさつに走る。「お騒がせしますが、よろしくお願います」



選挙カーのそばでは「カンにカンパを」と呼びかけた。

選挙カーの上には、この期間中ずっと私たちの運動を積極的に支援してくれた全国サラリーマン同盟代表の青木茂氏と、菅候補が並ぶ。選挙カーの前に机が置かれ、「カンにカンパを！」とかかれたカンパ用のアキカンがセットされる。近所へのあいさつを終えた運動員たちが、残り少なくなったピラを手にして、バス停に並ぶ人たちや、買物婦りの人の渦の中へ散っていく。

司会の片岡がマイクを握り、選挙カーの脇に立つ。この二十日間、片岡も菅と同様、幾度となくこうして有権者の前に立ち、人々に語りかけてきた。やっと最近、聴衆の様子をみながら語るべき

内容の力点を変えてみたり、候補者や応援弁士の演説をききながら、それに対する人々の反応を冷静に判断できるようになってきた。そうした判断を通じて、演説者の時間を調節したり、順番を入れ替えたり、内容に注文を出したりしてきた。「司会役というのは、よくいえばディレクター、悪くいえば敵役だな」と、片岡は笑う。

「ある新聞のサンプリング調査によれば、菅直人に対する支持票は大きく拡がりつつあり、菅の推定得票のマキシマムと、最下位当選者の推定得票のミニマムとは完全に交差しているそうです。この二十日間の選挙戦を通じて菅は確実に当選圏内に入ってきています。一人ひとりの市民の意思的な投票行動によって、市民政治勢力が誕生するのも決して夢ではありません」と訴える片岡の呼びかけで、最後の街頭演説は始まった。

菅がマイクを握る。

「……ロッキード事件は、私たちの前に、あまりにもみにくい現実政治の実態を明らかにしました。五億円という大金が、車から車へいとも簡単に手渡される。このような、私たちの市民常識では考えられないような行為が平然と行なわれ、政策をねじまげていく。……ロッキード事件を契機に、こうした自民党への批判は、その極に達しています。しかし、それにもかかわらず、野党に対する市民の期待感が沸き起こらないところに、今日の政治不信の根の深さを見ることができます。……いま新潟では、田中角栄が、あの橋も、あのトンネルも、みんな俺がつくった、と有権者の前で自らの地元利益還元能力を誇示しています。明日の投票日、越山会の人たちはおそらく棄権をすることもなく、田中角栄に一票を投じるでしょう。一方、都市におけるいわゆるインテリ層と呼ば

れる人たちは、『あれは悪い、その原因は××にある』といった認識をもちながら、政治不信に傾斜しつつあります。

しかし、皆さん、否定論理からは何も生まれません。……国政分野、特に衆議院においては、政党政治という枠に妨げられて、私たち市民は、身近に参加の場をもてないでいます。私たちはいつも、政党が提示したメニュー、すなわち候補者の中からそのいずれかを選ぶという投票行為に限定されてきました。私たちがいま展開しているこの選挙は、選挙運動自体に市民が参加する「市民選挙方式」です。私たちの選挙事務所には、日一日、たずねてくる市民の方たちが増えてきました。私たちは、この運動を通じて、大きな拡がりを感じています」

菅候補の最後の演説はつづく。「市民選挙」のもつ意味の大きさを語り、「市民運動と自治行政との連動」「地方分権の推進」を述べ、いまひとつの政策として、「都市化社会におけるシビルミニマム策定の重要性」「企業献金の禁止」の必要性について説いていった。足をとめて聴いてくれる人が目立つ。

「明日の投票日、皆さんの意志表示のチャンスとして、ぜひ投票所に足を運んでください。私たち一人ひとりの市民の意志表示が、腐敗し、硬直化した現在の政治を転換する第一歩です」

菅は演説を終えた。

その日、事務所では

この日朝六時、選挙事務長の田上等（二十六歳）は、連日泊り込んでいる選挙事務所で見覚めた。

選対ですっかり有名になってしまった、例のシマシマパンツ姿である。

選挙事務所は、この数年、菅たちが学習塾をやっているマンションの一室である。作業台に机、簡単な応接セット、それに三台の電話が事務所の什器である。どことなく、大学のクラブ室然としたこの部屋に、連日四―五人が寝泊りをした。菅の自宅に三―五人、結婚相談所をやっている西川信枝女史（六十六歳）宅に三人、この三か所が運動員の宿泊所である。

すべての情報を集中させておくこと、それが事務長田上の仕事である。そのため、田上は、この事務所毎晩最後の一人までつき合いはめになり、連日の睡眠時間が、四時間弱になってしまふ。毎朝モーニング・コールが入るのだが、受話器はとっていながら、「おでんがあるからだいじょうぶ」などと、支離滅裂なことを口走ることもしばしばだった。選対でのそれぞれの仕事は、各人に分担され、ほぼ自動的に進行していく。そうした中で、田上の一日は、人と会い、喋りつづけることで終始した。

朝六時半、標旗や腕章などの選挙七つ道具、ビラ、カンパ用のカン、カンパ帳、カンパ用の小机、自主開発したライトと発電機、候補者用造花、地図、スケジュール表、弁当、お茶、アメ、毛布、カイロなど一式を積み込んで、選挙カーが発券する。ここまでは、事務所の早朝作業である。この日までに、三万五千通のハガキの宛名書きなどの活動はすべて終了していた。だから、最終日の選挙カーを送り出してしまふと、ホーツとした雰囲気の流れた。

さて、この日、事務所の三台の電話は、一日中鳴りっぱなしになってしまった。運動員の友人たち、あちこちで私たちの運動を支援してくれている人たち、そして、未知の人々からの激励の電話

である。「きっと、当選しますよ」「むすこにも電話をしてやってください」「私も応援しますよ」「おふくろががんばってます」「友だちにビラを渡したいんですが」といった具合である。私たちが直接に知らないところでも、こうして人の輪が拡がりつつあることが実感された。

みんな散っていった

午後八時半、すべての運動日程を終えた選挙カーが事務所前に戻ってきた。

二か月間にわたる寝泊り態勢からやっと解放される田上は、早々と荷物を片付けはじめている。候補者の菅には、二本の取材が入っていた。候補者は、よく語った。「運動として拡がった」「とても

かく、やってよかった」「地域的な拡がりには予想以上だった」「自分たちもびっくりするほど積極的

に動いてくれた人がいる」「みんな、決してシラケてはいない」「人々の間に、自分で判断しようとする雰囲気を感じられた」「運動として、次に

ないでいける自信がもてた」

選対最後の運動として、十時半まで電話作戦を展開する予定でいたのだが、「最後の夜間電話は印象がよくないのではないか」という意見が多く、九時半をもって、すべての運動を打ち切るこ



マスコミの取材に対しては、わかってもらうまで徹底的に話した。

とにした。私たちの選挙事務所は、午後九時半に解散した。

菅は自宅に帰り、二十日間禁酒していたウイスキーを飲み、そして寝た。運動員は、三々五々、飲みに行ったり、マージャンをしに散っていった。おそらく、こんなにあっけらかんと、早い時間に解散した選対は、どこにもなかったにちがいない。

準備期間を含めてこの二か月間、選対にはたくさんの方が出入りした。昔からの運動の仲間、今度の選挙ではじめて出会った人たち、それぞれの人間のパーソナリティが重なり合いつつ、一つの雰囲気を選対の中にできあがっていた。運動員一人ひとりが、人間について、人間同士のつながりについて、政治的状况に主体として参加することについて、いま、ひとつの大きな「納得」や「認識」をもつことができたように思う。

選挙という「非日常」は終止符を打ち、明日からは、みんなそれぞれに、自分の「日常」の中に戻っていく。ともかく、私たちのたたかいは終わったのである。

投票日

十二月五日、日曜日。投票日である。運動期間中は、日曜日に一番たくさんの方が事務所に集まっていたのだが、この日、選挙事務所はまったく閑散としていた。

運動にかかわった者にとって、久しぶりにめぐってきた「自由な日曜日」である。ともかく、みんな十二分に朝寝を満喫した。中には（昨晩から明け方にかけて）酒を飲みすぎて、二日酔いになった者もいた。自宅で本を読んだり、彼女とデートを楽しんだり、各自が自由に、選挙期間中やり

残していた、ささやかで日常的なことに時間をつかった。期間中あれほど忙しかった事務長の田上も、「一応、この日から終戦処理態勢に入った。仕事がたくさんあるのはわかっているが、ポケットと置いていたかった。何か、ポケットとしていなくてはならない日のようにさえ思えた」と語っている。

候補者の菅は、昼過ぎに起きた。期間中同様、菅の自宅には学生連中が泊り込んでいた。みんなとにぎやかな昼食をとり、妻伸子（三十一歳）と一人息子の源太郎（四歳）と共に投票所へ向かう。ほとんどの有権者が、菅直人を知らないように思われた。割に落ち着いた気分の中で、自分の名前を投票用紙に書いた。



打ち上げコンパ。インターナショナルから人生劇場まで、歌のレパートリーは広い。

夕方五時、選挙事務所にポツポツ人が集まってきた。三十人の運動員が集まって「座談会」が開かれた。みんな、久しぶりに自由な時間をもったせい、か、たいそうリラックスした雰囲気の中で座談会はすすめられた。

運動部隊の中核的な役割をになった早稲田大学雄弁会の連中は、「会の仲間の中には、新自由クラブの応援に行った者もたくさんいるが、自分はこの選対にきてよかった。これからもここで活動をやっていける確信がもてた」と述べた。「これに会社に戻って、いまままでにやれなかった部分や、少しとだえた関係を復元していかなくては」とい

うサラリーマンの感想も述べられた。

この運動に関する反省点も数多く語られた。「たしかに何度も議論は繰り返し返してきたが、まだツメの足りない点も多かった」「自分は少し考えが異なっており、そうした点を運動の中ではっきりさせたかったが、忙しすぎてそのひまがなかった」

座談会のおとで、ささやかな打ち上げパーティがもたれた。

投票日のこの日、話題の中心は、今度の選挙のことであり、期間中にあったエピソードの交換であつたのだが、不思議と菅直人の「当落」については、ほとんど語られなかった。おそらく、みんなに「当落」への関心がないわけではなかった。しかし、この運動が「菅直人の選挙」ではなく、構成員一人ひとりにとっての「政治参加」であり「運動」であつたということなのだろう。

七万一、三六八票——次点

十二月六日、月曜日。開票日である。候補者の菅は、朝十時半に一回目の開票速報を自宅のテレビでみた。開票率四%、菅直人一、八〇〇票、得票率七・五%、三、四位との差が大きく離れており、「こんなものかな」「きびしいものだな」と、ちょっとがっかりしたという。一人で事務所に向かう。

選挙事務所では、事務長の田上をはじめ数人のメンバーが、昨晚の打ち上げパーティの残りもののおでんをつつきながら開票速報をみていた。票の伸びはいまひとつなのだが、事務所の中に悲憤感はない。開票率と得票をにらみ合わせて各自が頭の中で推定得票をはじいてはいるのだが、その

数字は口をついてでない。どこかあっけらかんとして、何ということもない冗談と笑い声がたえない。参謀の片岡も、「不思議と開票結果はあまり気にならなかった」という。

開票率が徐々にあがっていく中で、供託金没収をうけないで済む票数は突破した。得票率が次第に上がるのを見て「明日の昼頃には当選するな」という菅の冗談に、事務所中が湧いた。片岡は、この選挙に際してお世話になった人たちに次から次へと電話を入れている。電話の相手はみんな開票速報をみていた。みんなが語りがたかった。一人ひとりの中で、この運動が大きく根づいていることを、片岡は感じとっていた。

この日、東京七区の十五開票所に、十五人の開票立会人が選対から派遣されていた。立会人のすべてが一樣に感じたのは、「菅直人」の得票の伸びぶりに他の候補者の開票立会人が驚き、興奮していたことだという。

三鷹市の開票立会人をひきうけてくれたいた岩附茂氏（二十四歳）は、昼頃までずっと「菅」がトップで、票数がでるたびに開票場全体がワーツと湧いて「痛快だった」という。保谷市で剣道の先生をしている高倉敏氏（四十四歳）は、投票用紙に書かれた字を他候補のものと比較して、「菅直人」の場合、非常にいいねいに書かれているも

1.	福田篤泰 (自)	確	16
2.	長谷川正三 (社)	確	13
3.	大野きよし (公)	確	10
4.	工藤あきら (共)	確	10
5.	菅直人 (無)		7
6.	川田章 (無)		2
7.	早川輝道 (無)		

次点——しかし勝利の造花が飾られた。

のが多かった、という。

「政治に市民常識を！」をスローガンに戦った今回の衆院選であった。すべての運動が自分たちの手でおこなわれた。未知の人たちからの多くの支援と運動参加があった。こうした中で、私たちは終始、運動姿勢をくずすことなく、政策を述べ、有権者に判断を迫っていった。私たちの運動が、市民運動から明らかな政治運動に転化した今回の衆院選であるが、私たちは「トーナメント戦」に勝ち残り得たと確信している。今回の選挙が一つの結節点として、次なる状況下での次なる運動につながっていく。私たちにとって、この二か月間は、長くもあり、そして短くもあった。ともあれ、一つの節は終えたのである。

東京七区、有権者総数百万二、一三一一人 投票率六一・八四%、「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」推薦革新無所属候補、菅直人(三〇)、七万二、三六八票(得票率一一・七%) —— 次点。

私たちは、敗北した。

指定席 東京七区に立つ

「東京七区から菅直人氏出馬へ」

東京武蔵野市の市民グループ「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」は十五日、今度の衆院選で東京七区から菅直人氏(三〇)を出馬させることを明らかにした。菅氏は二十三日正式に立候補表明するが、一昨年の参院選で市川参院議員を「かつぎ出した」市民運動グループのリーダー。

(毎日新聞 五十一年十月十六日)

ロッキード政治を許すな

21 7万 1,368 票の記録

五十一年二月六日に表面化したロッキード事件の衝撃は、私たちを今回の総選挙に向かわせる大きな力となった。それは、一方では、長期にわたり政権を独占してきた自民党が国家権力を私物化し、カネと人事権を駆使して、政策決定を金もうけの道具化してきた構造を国民の前に明らかにした。そして、他方では、長期単独政権という原因づくりに文字通り加担してきた既成野党の問題性が浮き彫りにされたのである。

国会やマスコミが精力的に事件の究明を進める中で、私たちのグループでも、何人かが個々にロッキード事件糾弾の運動に取り組んでいた。三月頃から「理想選挙推進市民の会」はロッキード糾弾キャラバンを全国に繰り出した。五月末からこのキャンペーンに参加した朝倉剛一は、私たちの機関紙『シビルミニマム』同年七月号に、こう記している。

二十か所に及ぶ青空演説会、福島、山形における地元青年団との懇談を通して我々が得たものは、積極的にチラシを受け取る姿勢にみられる関心の高さと、「ロッキード事件は確かに重要な国政の問題であるが、ロッキード問題は地元にもある。それを肅正するには、義理人情と金で縛られる村の選挙をかえることが第一だと思うが、それができない」というもどかしさであった。しかし、我々の中にもあるこの種のもどかしさを共有することにより、連帯感を深めることができた――。

また何人かは、『週刊ビーナッツ』、日韓連帯連絡会議などの集会、デモに参加し、あるいは自分の住んでいる町で、「事件糾明に国会頑張れ!」、という請願の署名運動などに取り組む者もいた。五月のある日、菅直人と片岡勝は、日高六郎氏に会った。その際、ロッキード後の衆院選挙の話題の中で、日高氏は次のような提案をした。

「フランスでは、インドシナ戦争末期に、急進社会党という一、二議席しか持たぬ党からマンデス・フランスが首相に立候補した。そして、自分が首相になれば、何週間かのうちに必ず戦争をやめる。それが出来なければ、首相を辞任する、という公約のもとに当選した。この例から考えたのだが、

かなり著名で市民派的な人を、野党の統一首班候補者にするために立候補させられないだろうか」この話を、菅らは二院クラブの市川房枝氏、青島幸男氏らに伝えたが、「野党各党にそのようなコンセンサスを作らせることは無理であろう」ということで、そのまま立ち消えとなった。

投票の「受け皿」を

さまざまな事件糾弾の運動は、それが展開するにつれて、年内には必ず行なわれる総選挙に向けて、自民党に大きなダメージを与えることを最も有効な批判を構成する、という論点を次第に強めていった。



選挙区を離れ新宿へ。東京7区だけではなく、田中角栄との戦いでもあった。

そのような状況の中で、菅はこう考えていた。「ロッキード事件糾弾集会などに出席したりすると、その発想の仕方に異和感をおぼえる。彼らの発想は、「自民党をつぶす」というものだ。しかし「つぶす」手段を明確にしないデモや集会をいくらやっても、実際につぶれるものではないだろう。選挙で何らかの対案を示さなければいけないのではないか」

八月にはいり、彼は各種の集会でこの趣旨を呼びかけた。しかし、その反応は必ずしも積極的な

ものではなかった。これに関連して、『シビルミニマム』五十二年九月号で、彼はこう述べている。

世論、マスコミ、市民運動などのこうした激しい追求に対して、自民党は国民の支持という免罪符を得ることにより、全てを解消しようと、選挙体制作りをやっきになっている。しかし、自民党の内紛がどういう形で收拾されるにしろ、ロッキード事件の原因が自民党に長期単独政権を許してきたことにあるとすれば、今度の総選挙では、自民党を政権の座から引きずり降ろさなくてはならない。

政党サイドの総選挙準備が進む中で、ロッキード事件に怒りを感じている人が圧倒的に多いにもかかわらず、市民運動の中では、総選挙自体への提案はまだ明確な形をとっていない。これは本来、自民党にとって代わるべき既存の野党に信頼が持てないこと、「選挙」に対し「権力志向」を感じてためらう市民運動が多いことによると思われる。しかし、「選挙」を、政党候補者が票を集める運動でなく、二年前の市川房枝さんを推した参議院選で一部実現したように、市民が自己の政治的意志を表現する場として積極的に再生してゆくことが、これからの市民運動においては必要であろう。

こうした観点から、ロッキード事件に強い憤りを覚えているもの、既存の野党には投票する気になれないという多くの市民が、投票という行為でその意志を表現し、運動に参加できる場を作るため、「投票の受け皿」となる候補者を各選挙区で推薦し、立候補させること、すなわち「ロッキード事件に怒り、かつ既存野党に信頼を持てない市民の『投票の受け皿』を作ること

を提案したい。

単なるアンチか、新しい運動か

このようなことを考えはじめた私たちに、青島幸男氏秘書の青野氏から次のようなアドバイスがあった。

「君たちは、そうした行動を、ロッキード事件とそれを起こした自民党への怒りの表現として起こそうとするのか、それとも君たちをも含めた新しい市民政治勢力の旗上げととらえるのか、それははっきりさせたほうがよい」

私たちのグループの中でも、前者をより重視するもの、後者を強調するものが出て、議論になったが、結論は、二つは矛盾するものではないこと、そして戦後の「保革体制」の構造汚職として明らかになったロッキード事件に対し、後者のようなとらえ方をしなければ、建設的な対案とはなりえない、ということであった。

私たちの手で

いろいろな集会の席上で、また、大阪・京都・神奈川のいくつかの市民運動グループに会って、菅、片岡、田上らは、「受け皿構想」——市民選挙の呼びかけを続けた。そんな呼びかけに対し、多くの人は、「もっと具体的な話にしてから持って来てほしい」という反応を示した。たしかに「やるべきだ」というだけでは説得力を持たない。いよいよ私たち自身がそのための具体的な行動を起こ

すかどうかの決断を迫られるときが来た。

市川房枝氏の選挙の体験から、私たちは心理的に国政レベルの選挙に対する距離感が少なかったのだろう。そして、市川選と昭和五十年の武蔵野市議選の二つをくぐり抜けて来たメンバーも多く、片岡勝のように「選挙が楽しくてしようがない」などと公言してはばからない男もいる。春以降、「この絶好の状況の中で何もしない手はない」とはやる心を押さえてウズウズしていた青木守は、「この辺で一発デカイ事をやらんと」と、菅たちをあおり続けた。

大阪の堺市で、仲間と「こんにちは新聞」という地域新聞を作っている長谷川氏は、こういって私たちを励ました。「選挙の話は、おもしろいし、趣旨には同意するが、自分たちの力量や運動の現状から考えて、自分たちの手で候補者を立てるのは無理だ。それに、そのような運動は東京の方がやりやすいのではないか。もし東京でやるのなら協力する」

私たちが呼びかけた他のグループも、おおむね事情は似かよっていて、自分たちはやらない（あるいは出来ない）が、「全体の流れとしては君たちのような動きは必要なのだから期待しているよ」という声が多かった。こんなことから、田上は、「私たちは望まれているんだな、という確信を深めた」という。

私たちが自ら総選挙にかかわる決心を固めたのは、夏も盛りを過ぎた八月下旬のことだった。

仲間から候補者を

「誰を候補者にしようか。＼ヤル＼」ことを決意した私たちの次の問題はそれだった。

もちろん、市民運動グループへの呼びかけと並行して、それまでも候補者のことは考えてきた。片岡はこう語る。

「あまり有名な人をつかこうという発想はなかった。とにかく全国各地から多くの人に立って欲しかった。そしてそれは、ロッキード事件の構造と戦う人であることと、既成政党と関係がないという意味で純粹であることを大前提にしていた」

青木茂・全国サラリーマン同盟代表委員は、相談に行った私たちにこう答えた。

「社会的な地位や業績のある人間が、今回のロッキードに対決して出馬する、という状況ではない。むしろ処女性を持った候補者が出て行くべきだ」

また市川房枝氏からは、「若い人から一人、著名の人から一人立てる、ということを考えたらどうか」というアドバイスがあった。

グループの仲間から候補者を立てる、という大それた話が、急に現実味を帯びてきた。そうなる、いろいろな条件から考えて、衆院選の候補者になりうる者が、私たちの中にそう何人もいるわけではない。誰の胸の内にも、菅直人や朝倉剛一の名前が浮かんでいた。二人とも、候補者としての適格性は充たしていると思われ、また菅は弁理



大阪の市民運動の仲間、長谷川俊英さんも応援にかけつけた。

士として特許事務所に勤務、朝倉は市川房枝議員の秘書という身分であり、終身雇用制の中のサラリーマンよりは、自由のきく身であった。

九月十五日、これまで選挙の話にはあまり加わって来なかったメンバーも含めて二十数名が集まり、ミーティングを持った。その時の経緯を、『シビルミニマム』五十一年十月号は次のようにレポートしている。

今の政治状況に対して、出席者の全員から何かをやらなければいけない、という発言が出され、選挙が最も有効かどうかについて、まず議論があった。他にも意見広告などの案が出されたが、単なる否定型の運動から参加型の運動にしなければならぬとの意見が強く、選挙によって政治を我々市民の手に取り戻すことを呼びかけようと決めた。

しかし、有機農業班のメンバーからは、稲刈りなどの援農や、無公害石けんの販売などのスケジュールが一杯で忙しく、手の空いている時にしか手伝えないと主張があった。これは個別テーマを中心とした市民運動と、国政レベルの運動を共に必要とは考えるものの、順序としては、やはり個別のテーマや地域の問題を優先し、継続していくことが肝要であるという認識によるものだった。だが、多くのメンバーからは、やはり現在の状況において、この衆院選で市民から候補を立てることが必要ではないか、との意見が出され、結局、選挙を「やる」ことでグループ内のコンセンサスが得られた。

これは敬老の日の休日、調布市に住むグループの一人、吉田光孝(二十八歳)の家で、真昼間、四、五時間をかけて行なった討論の結果であった。

そして、複数の候補者を立てること、具体的には東京七区に菅直人、四区ないしは十区に朝倉剛一を立てることを同時に決定した。「複数の候補者を」というのは、単に一人の人間、たとえば菅なら菅を国会議員にするための運動ではなく、もっと大きな市民政治勢力をめざした運動の一環であることを示したかったためであり、また物理的な運動の拡がりをねらったためでもあった。

力量的に大丈夫なのか、という点は誰もが考え込んだところだが、それをいえば、たとえ候補者が一人であっても、衆院選を戦うだけの力量すらも、選挙の常識論でいえば、今の私たちにありわけではない。テーマが共感を呼べるもので仕事があれば人は集まる、というのは、これまでの運動で経験したところである。私たち得意の楽観論で「走り出してから考えりゃいい」とばかりに、考えても仕方ないことは考えないことにした。

ところが残念なことに、候補者「候補」の朝倉剛一は、十月三日、個人的な理由から「候補者というかたちでこの運動に参加することは出来ない」との意志を明らかにした。

この日のうちに、あくまで複数の候補者を立てるために他のグループに呼びかけを続ける、しかし、もし適当な人が見つからなくて、結局、菅一人ということになったら趣旨をまっとうできない。その場合はどうするかについて議論を続けた。その結果、呼びかけを続けると共に、たとえ一人だけでもやろう、という方針を固めたのであった。

全国で市民選挙を

必要なのは、私たちと同じような市民選挙で戦う候補者を、全国に一人でも多く立てることである。『田中』の居直りに対決するため、今こそ全国で市民選挙に立ち上がろう！』という次のようなビラを、全国五十余の市民運動グループに送ると共に、スケジュールの可能なグループには、直接話をするために出かけて行った。

今回の選挙が「既成政党のいずれかを選ぶだけの選挙」となれば、市民の意志表示の場となり得ず、ますますシラケが深まり、拡大するだけである。選ぶべき政党を持たない市民運動グループが選挙に積極的に参加して自分達の仲間を立候補させるこそが、こうした状況を打破するため、今必要なのではないだろうか。

こうした観点から、一昨年市川房枝さんを参議院選にかつぎ出し、その後もそれぞれのテーマについて市民運動を続けて来た我々のグループは、仲間の中から候補者を推薦し、東京第七区で闘うべく準備を進めている。我々だけでなく、全国の多くの市民グループが、自民党に対決する市民選挙に立ち上がることを強く期待する。

こうした市民選挙の拡がり、これまでの個別テーマ毎ごとの市民運動や自治体における直接的市民参加にとどまらず、国政選挙においても市民参加による新しい政治状況を生み出す第一歩となることを確信する。

あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会

しかし、本当に残念なことであったが、以前に「具体的な話になってから持ってきて欲しい」といったグループも含めて、候補者を立てて衆院選に臨もうというグループは、ついに現われなかった。

私たちは、名もなき菅直人一人をかついで衆院選という大きな戦場に切り込むことになったのである。

どうする？ どうなる？

およそロッキード事件が表面化したあとの数か月間ほど新聞が面白かったことは、かつてなかったといつていいだろう。青野氏は「みんなが茶の間でもすごい関心をもって、テレビ・新聞・雑誌を見ながら判断しようとしている」といった。

そのような状況の下で、みんなの判断に耐えうるものを提示することができれば、ある程度のことろまで運動が拡がり、支持が得られる、という確信を私たちは持っていた。逆にいえば、私たちが惨敗するというケースは、運動の趣旨そのものが、その状況に全く適合していないとき以外には考えられなかった。

菅はこう語る。

「以前、より良い住まいを求める市民の会で、市街化農地の宅地並み課税推進の運動をしていたと

きに、講演会を企画したことがあった。そうしたら、都留重人氏、市川房枝氏、青島幸男氏、青木茂氏といった錚々たるメンバーが参加してくれた。このとき、テーマが適切であれば共感が得られる、ということを感じた。

四十九年の市川房枝氏の選挙でも、あの状況の中で打ち出したテーマが適切だったからこそ、人も金も集まり、そしてマスコミの協力も得られた。またこのとき、「自分たちの感覚を信じて行動を起こしても通じるんだ、という確信をもつことができた」と田上はいう。

三万票、そして供託金

とはいうものの、私たちの運動が、限られた選挙運動期間の中で、どれだけの人々に理解され、それが何票に結びつくのか、ということになると、まったく雲をつかむような話であった。

青木茂氏は私たちにこういった。

「立候補しようと思うがどうだろう、という相談なら、無理だからやめるといっただろう。立候補を決めてから相談に来たので、がんばれ、出来るだけ協力しよう、というほかなかった」

また、「基礎票もゼロに等しく、カネも無し、では五百票しかとれないぞ」という人もいた。

実際、私たちとしても、選挙戦中盤までの最大の関心事は、『選挙特編』の供託金没収点——（七区の場合、投票率六〇%で約三万票を超えられるかどうかであった。当落を云々するどころではなく、いかに泡沫候補扱いを、特にマスコミからそうされることを避けるか、ということ）を、マジメに心配したものである。

どの新聞、どの雑誌の選挙予想を読んでみても、東京七区には、「自社公共の指定席選挙区」「全国有数の無風選挙区」といった見出しがついて回っていた。それは十月中旬、菅が立候補を明らかにした後ままったく変わらず、四候補の名前の上には当選確実を示す二重丸がきれいに並ぶのが常だった。

市民運動から国会へ

私たちは、「市民運動から代議士を送り出す」という明確な論理を、最初から持っていたわけではなかった。自治体、特に市町村レベルの議員選挙なら、市民運動の要求を掲げて立候補する、という論理が通りやすいし、実際にそうした経験もしてきた。だが、国政というのは、市民参加を実現する「場」としてはきわめて遠いところに位置している。私たち市民の感覚でとらえた問題意識や要求を国政に伝えようとすると、そのルートがきわめて貧弱なものしか用意されていないことを知って啞然とする。マスコミの記事として取り上げるのを期待するとか、政党、議員に陳情するとかの方法しかないのである。

ところが、マスコミが必ず取り上げるといふ保証はない。記事として面白い場合に限られてしまう。それに、市民運動の記事は社会面扱いだ。政治面、つまり政策決定過程の動きの一つとして取り扱われることは皆無であろう。政党議員ルートも、市民感覚から問題性をとらえる体質が欠如しているのが実状であり、これこそ私たちの問題とするところである。

こうした事情が国政を遠いものにしてしまっており、市民運動グループが直接国政に参加すると

いう発想を持ちにくくしている。それには運動グループ側の事情も関係している。

地域性の強い住民運動のグループが、自分たちの地域を越えて運動を拡げていくのは難しい。これは市議選を行なったことのあるグループに共通の実感のようだ。もう一つ、市民運動と選挙の、運動としての性格の違いも無視できない。市民運動というのは、コソコソと、自分の生活の範囲内で、やれるだけのことをやるといふ側面が強い。しかし、選挙はそうはいかない。何か月かの間、自らを燃えさせたせ、やるべきときには日常的な生活範囲を越えてでもやらなければならない。

多くの市民運動は、専従など持たない、純粹なアマチュア集団である。そして市民運動が個別のテーマを深く追求するのに対し、選挙、特に国政選挙では、国政全般にわたる態度を表明することが要求されるので、市民運動に決してなじみやすいものではないだろう。

既成のパターンを打ち破ろう

候補者選定の過程で、現在の政治がいかに特殊化しているか、ということに、私たちは改めて気づかされた。どの政党の候補者も、政党組織の内部や主要な圧力団体の出身者で占められている。どちらにしろ、市民感覚にあふれた政党や圧力団体など存在しないのだから、候補者の資質がかたよってしまうのは目に見えている。

「政治家の質がきわめて悪い。おれは議員になるより社長になる方がたいへんだと思っている」と片岡はいう。

どちらがたいへんかは別として、誰もが経営者と同様に、いや、むしろそれ以上に、政治家には優秀な人材が必要だと考えるだろう。しかし、政治家となるパターンが特定化されることによつて、優秀な人材が政治家になる可能性は少なくなるし、かりに有能だとしても、ある領域に偏った能力をもった議員ばかりが生まれることになる。しかも、恐ろしいのはそれだけではない。政治が特殊化され、一部の人間のものとなるということは、他の大部分の人間たちを「観客」に追いやるということでもある。その結果、政治は「あいつら」がやるもので、「おれ」は関知しない、という態度を生む。いくら能力があり、知識が豊富であっても、観客である限り有効な力とは成りえない。民主主義は機能しえない。

市民運動は、まさに「観客」であることを拒否した市民の運動である。そして、運動への参加者は決して特殊化していない。問題意識と運動のための物理的時間さえあれば、誰でもやれるものだ。そうした運動の中から候補者を出す、そして代議士を国会に送るといふのは、きわめて意義深いことであるに違いない。

今回の衆院選を、そのための「足がかり」にしよう。既成のパターンを打ち破り、政治状況を変えするための運動の一つの過程にしよう。選挙を通じて、私たちの運動の趣旨を拡めたい。それには当選したい。準備のおくれで当選がかなわない場合でも、一応の成果をあげなくてはならぬ——これが選挙戦直前の私たちの姿勢であった。

名もなく組織も金もなく

独自に態勢が作れるか

さて、菅直人を候補者として衆院選を戦うことに腹を決めたものの、前途は不安に満ちていた。「国政選挙」については二年前（昭和四十九年）の市川房枝選挙の経験があるとはいえ、今回の選挙は、それとはかなり質の違うものである。「市川房枝大明神」のもとにみこしをかついで突っ走った前回と、私たち自身の仲間を候補者にした今回とは。

少なくとも、前回は名前があった。その名前のもとに、金も人も集まるだろうという予感があったし、また実際に集まりもした。ところが、今回の選挙ときたら、まず名前（看板・知名度）が、そして組織（地盤）が、金（カバン）が、いわゆる選挙に必要といわれる「三バン」のすべてが、初めから欠落していた。

それが私たちの手にはないのなら、そして、どうしても必要なものならば、私たち自身でそれを作り出して行くほかはない。あるいは、それなしにでもやって行けるような、別の方法を考え出さなくてはならない。

背後に不安感を引きずりながら、それでも持ち前の楽天的な思いに助けられて、とにかく市民選

挙への挑戦は、五十一年九月下旬、その胎動を始めようとしていた。

名前をどうしよう

私たちには、候補者の知名度云々を問う以前に、運動母体となるグループそのものの名前がなかった。

九月十五日のグループの集会で、今回の衆議院選挙を市民運動の延長線上に置いて行なおうという同意が得られたあと、全国の市民運動グループに、その趣旨を訴えるための「呼びかけ文」を送った。

九月の下旬、菅、片岡、田上、朝倉の四人が頭を突き合わせて「呼びかけ文」に載せるスローガンを考えている時に、突然、誰かがこうつぶやいた。「あれっ、グループの名前がない！」

そうだ、私たちのグループには、定常的な名前がなかった。仲間うちで話すときには、いつも「このグループはねえ」といった調子で事は足りており、マスコミが扱う場合の呼び名も、「青年グループ」「草の根市民運動グループ」「参院選で市川房枝氏をかつぎ出した若者たち」などと、特定まったものはなかった。

何か大きなイベントがあって、手続き上、あるいは見てくれ上、名称が必要になったときに、そのつど「市川房枝さんを勝手に推薦する会」「だから私達は田中栄さんを推薦します市民の会」などという、どこかのテレビ局も顔負けの長い名前を、みんなで作っていたのである。したがって、今回も今回なりのイメージを反映した名称を、急いで作り出さねばならなかった。

こんなとき、私たちがいつもとっている方法がある。それは、「今度の運動を、なんでお前さんはやるんだ」という質問を、お互いにぶつけ合い、その中から出てきたエッセンスをつなぎ合わせて行くというものだ。

今回、他の市民運動グループに訴えるに足るスローガンを掲げるために、名称の設定には少なからず気をつかった。それはまた、この運動の動機の再確認であるといってもよかった。なぜ、私たちは力量的な無理と準備不足を承知しているながらも仲間を推し出し、今回の衆院選をたたかおうとしているのだろうか。

さまざまな、それこそ玉石混淆の答が飛びかった。それらは、あますことなく、小さな紙片に書き出され、机の上に並べられた。そこでふるいにかけられ、最後に残ったのは、「あきらめないで」と「参加」という二つの言葉。

前者は、無党派派層の中に充満している一種のシラケ状態に対して、決してあきらめてはならないんだ、という悲願にも似た願いから、そして後者は、ではどうしたらよいのかと問われた場合に、自分たちで自分たちの信頼しうるものを作っていけばよいではないか、という積極的な発想から生まれたものである。あとは、この二つの言葉を中心に、うまく言葉をつなぎ合わせることを考えればよかった。

九月二十九日、こうして私たちは、次のような看板を今回の運動について掲げることになったのである。

『あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会』

何から手をつけよう

さあ、これで運動の先頭に立てるのぼりの文字だけは出来上がった。次はいよいよ実際の選挙態勢を組み立てる番である。

ここで、なぜ私たちが、今回の選挙をやろうとしたのかをふり返ってみよう。出発点は、ロッキード事件であった。それに対するアンチテーゼとして、私たちは立ち上がろうとしていた。しかし、もう一步踏み込んで考えてみると、ロッキード事件の背後には、戦後三十年にわたる日本の政治体質というものが横たわっており、それへの真の意味でのアンチを唱えるつもりなら、ロッキードだけにこだわらず、市民政治勢力を打ち立てることにこそ力を注ぐべきなのではないか、というところに行きついた。私たちは、その勢力を拡げていくための一つのきっかけになれないものだろうかという発想のもとに、今回の選挙を決意したのだった。

それならば、当選に必要な一定の票数に達するために、すでにある人間関係などを頼りに一票一票を確実に固めていくという従来の選挙運動の発想は、私たちとは相いれないものである。私たちが一石を投じることによって、周囲に波紋が拡がっていかねばならない。そのためには、選挙態勢



新しいメンバーがふえて、名札が必要になった。

の組み立て準備も、「運動の拡がり」ということを念頭に置いてやらなければならない。

こうした発想から、十月三日の、菅直人ひとりを候補者とするという決定のあと、私たちがやるうとしたことは、次のようなことであった。

- (一) 学者などの著名人、地域の活動家に会って、私たちの運動の趣旨を理解してもらい、できれば支持、推薦をしてもらう。
- (二) (一)の前段階として、選挙区を調査し、どんな市民運動グループがどのような活動をしているか、その内容を知り、私たちの趣旨を呼びかける。
- (三) 学生などに向けて、参加を呼びかけるビラをまく。
- (四) マスコミに今回の運動の趣旨を訴えることによって、その背後にいる膨大な数の読者に判断の材料を提供する。

ここまでは、「趣旨を拡げる運動」である。一方、実体的な組み立て準備の面では、

- (甲) 予算を組み、それにしたがって、金の集め方を考える。
- (乙) 選挙事務所を開く場所を捜し、事務態勢を整える。
- (丙) 「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」の規約を設定し、政治団体として届け出る。
- (丁) 選挙で訴える具体的な政策を立案する。

の四項目があった。

これらのことを、すべて、迅速かつ確実に処理しなければならなかった。公示日の十一月十五日までは、あと約六週間しか残されていない。しかも、運動員のほとんどが仕事をもっているため、

六週間でベタに使える仲間は一人もいない。それに態勢づくりだけにだけ六週間をついやすことはできない。態勢が出来上がったあと、公示日前にやっておかねばならない仕事があり、それこそうんざりするほど控えているのだ。市川選の経験があるだけに、それらが次々に頭の中に浮かんでくる。

とにかく、私たちには時間がなかった。選挙態勢組み立ての基礎工事を完了目標は、十月二十三日。この日、「草の根千円パーティ」の開催が予定されていた。今から振り返ると、それまでの期間は、まさに手さぐりと焦燥感の連続であった。

この時のように、菅は次のように回想している。

「田上、片岡、朝倉と私の四人が中心となってスタートしたが、初めのころは昼間の事務局がないため、連絡が不十分になりがちだった。日常的な人間関係と情報の共有がないと、思ったとおりに進まない。学生時代からの友人である田辺孝則が、選挙準備に使っていた渋谷の事務所に来たのは、そんなときだった。

この日は、朝倉の立候補中止に加えて田中栄氏など青空テント・グループの中心メンバーの選挙非協力表明など、いくつかのトラブルが重なった。進めるべきことが、なかなか進まなかった。運動のエネルギーが、急速にしぼんでゆくように感じられた。田辺は「今となっては、もう立候補はとりやめられないのか」といって私の顔をのぞき込んだ。いまが一番しんどい時だな、とそのとき思った」

このように、態勢の組み立ては、内部で予想した以上に困難の連続であった。が、なんとか乗り切ることができた。以下その経緯を順にみてゆこう。

著名人への呼びかけ

私たちの周辺には、これまでの運動を通じて知り合ったさまざまな著名人がいた。その中で、私たちの運動の趣旨に賛同してくれそうな人、または私たちと近い発想を持っていると思われる人に直接会って、今回の選挙を行なう趣旨を話した。

手ごたえは、全般に好意的であった。運動の趣旨そのものを否定する人はほとんどなく、実際に参加はできないが頑張ってくれ、という反応が多かった。具体的には、篠原一、都留重人、伊東光晴、松原治郎、秋山ちえ子らの諸氏である。その中の一人、松下圭一氏の言葉を借りれば、「これは、市民運動から国政への最初の挑戦である。ぜひとも頑張ってほしい」ということであり、氏は後日、「やっと自分の言ってきたような状況、すなわち、市民の国政への自発的参加という状況が出てきた」と語った。

賛同の意志を表明するだけではなく、実際に積極的に動いてくれた人も少なくなかった。全国サラリーマン同盟代表委員の青木茂氏は、サラ同をあげての全面支持を約束し、社会学者の日高六郎氏、保健同人主筆の大渡順二氏、慶応大学教授の内山秀夫氏は、次のような推薦文を寄せてくれた。

青木氏「参議院の二院クラブは、ユニークな政治活動をやっております。衆議院にも一院クラブがあつていいと思う。衆議院に一院クラブをつくり、やがては市民党にまで大きく展開する第一歩として、菅君に期待します」

大渡氏「菅君たちの青年運動の芽は、ぜひ、何としても伸ばしたいと思う。今は、市川房枝先生

は元氣いっぱいだが、私たちは市川先生のあとに一日も早くヤング勢力を育てあげて、正義の政治布陣を整えなければならぬ」

日高氏「名もなく、金もなく、組織もない、一人の青年の立候補に注目します。市民運動としての選挙運動の新しい出発を期待します」

内山氏「わが国の政党政治は壊滅している。それはなにも自民党ばかりの問題ではない。市民運動から代表が出ないのはおかしい」

推薦できません（市川房枝氏とのやりとり）

読者の中には、私たちと市川房枝氏とのやりとりを、新聞などで読まれた方も多ことだろう。たしかに私たちは昭和四十九年の参議院選挙に市川房枝氏をかつぎ出した青年グループだ。今回の候補者、菅直人は、その推薦人三人のなかの一人（他は田上、朝倉）であり、選挙事務長でもあった。選挙後もいろいろな運動を通して協力関係にあった。今回の運動の場合も漠然とした話の段階から何度か相談に行っており、その時の感触から候補者が具体化した場合には、彼女の推薦を期待していた。

そこで、候補者が決まった段階で何度か話し合うとともに、参院選立候補要請の時と同様に、グループの十八人の連名による、次のような申し入れ書を昭和五十一年九月二十四日に市川氏に手渡した。

衆議院選挙に際してのお願い

市川先生に候補者となっていたいただき参議院選挙を共に闘ってから、早や二年余が経ちました。その間、以前にも増してお元気で活躍のご様子に接するにつけ、「やはり出ていただいでよかったです」とよろこんでおります。

〔ロッキード汚職とその原因〕

さて私達は、今年二月、ロッキード汚職が暴露されて以来、個人的にデモや集会に出席するとともに、この問題について話し合ってきました。ロ事件の解明が進む中で、政治による金もうけと、その金による政治力の拡大という「拡大再生産」が、あれほどまでに露骨に行なわれていることを知って驚くとともに、自民党を介しての黒幕支配が今でも根強く残っていることに強い憤りを覚えています。

骨の髄まで浸み込んだ自民党の金権体質、構造汚職を生んだ原因を考えると、やはりそれは自民党に長期単独政権を許してきたことにあります。いかなるチェック制度があったとしても、長期間一党内で同じような顔ぶれによる政権が維持されていれば、その腐敗をチェックすることはむずかしいからです。

こうした自民党の強大な長期政権は、他方で「アンチ自民党」としてのみ成立しうる社会党の体質を固定化させ、自民党の絶対的強さが失われ相対化しつつある今日、社会党は自己の存在意義を見出せなくなっています。

〔国民の反応〕

いまでもなく国民の多くはロ事件、構造汚職に対して強い関心と憤りを感じています。しかし、同時に「結局今度の総選挙でも自民党はたいして負けはせず、何も変わらないだろう」といふ、あきらめに似た不満、不信を抱き、傍観者的シラケ気分をますます強くしています。

こうした状況下で総選挙が行なわれれば、多くの市民にとって投票する対象が見出せず、大量棄権による投票率の低下が予想されます。そして、投票率の低下は、自民党の現状維持を許す結果を招くことになると思います。

〔市民運動〕

ロ事件に対しては、「週刊ビーナッツ」を軸に、旧ベ平連系のグループ、婦人有権者同盟、がまんならん隊の老人など、多くの市民運動グループが活発に活動を展開しています。また多くの学者、評論家も新聞、雑誌などを通じて、「戦後政治体制終焉の時であり、市民は今こそ観客席から舞台の上に出て何らかの行動を起こすべきだ」と訴えています。

しかし、今度の衆議院選挙に対して、自民党に打撃を与えるため、意見広告、アピール、集会、



「政治に市民常識を！」と呼びかけた。

デモといった運動は数多く提起されていますが、衆議院選挙に直接市民グループから候補者を立てるといふ提案はどこからも提起されていません。「自民党をつぶす」には、まさに選挙戦を通して自民党を糾弾し自民党の議席を減らすことが最も効果的であるばかりでなく、選挙を単なる「投票の機会」としてでなく、市民の意思表現の運動の場として捉え、自分たちの仲間から候補者を立てて闘うことが多くの市民の共感と参加を生む上でも必要なはずです。そしてこうした選挙の中から初めて単なる「アンチ体質」でない市民政治勢力が生まれてくる可能性があると思います。

〔衆議院選に対する取り組み〕

以上のような考えにもとづき、他のグループに呼びかけるとともに、私たち青年グループとしても話し合った結果、東京七区から菅直人さんを推薦立候補させて闘ってゆこうという方針を固めました。

〔選挙戦に対する考え方〕

選挙戦では、政治体質の問題を中心に「政治資金のあり方」と「行政権力の私物化に対するチェック制度」について具体的提案を行なうつもりです。また、これまでのテーマ別の市民運動や、地方自治における市民参加に加えて、国政選挙に対する市民の積極的参加が日本の民主主義再生にとって必要であることも併せて訴えてゆきたいと考えています。

〔市川先生へのお願ひ〕

市川先生にも、今回の衆議院選に關していろいろなお考えや、ご都合がおありだとは思いますが、これまで述べました運動の趣旨及び方針をご理解いただき、ぜひこの運動に積極的な参加

ご支援をいただきたくお願ひするものです。

昭和五十一年九月二十四日

青年グループ

これに対し、十月十二日に次のような趣旨の返事が直接、片岡、田上、菅、朝倉に手渡された。その返事は「運動の趣旨は理解できるが、衆議院選挙は政党を選ぶもので、無所属の自分として推薦応援はしない。しかし、協力の意味で五十万円寄付をする」という趣旨のものであった。

市川氏の「衆議院は政党、参議院・地方選は無所属が望ましい」という考え方は、前からの彼女の主張でもあり、よく理解できた。

しかし、既存の革新政党にも期待を持ってない市民が、新しい市民政治勢力をめざして「革新無所属」の候補者を推す運動は、彼女の主張とも必ずしも矛盾しただけでなく、衆議院選挙においてもボランティアによる選挙が可能であることを示すことは、政党に対しても大きな刺激を与えることになるはずだと私たちは考えた。こうした点から彼女に再考を求めたが、参議院選立候補要請の時のように彼女の決心を変えることは最後までできなかった。

カンバなど市川氏の間接的な協力は非常にありがたかったが、参議院選挙などを通して人間関係のオーバードラップも多く、社会的にも市川氏に近いグループと見られているだけに、その後、市川氏の推薦がもらえない理由をあらこちらで問われて、その経緯説明が大変であった。

地域内市民運動グループへの呼びかけ

東京七区内には、多数の市民運動グループがある。これらのグループが私たちの趣旨を理解し、協力してくれることは、非常に大きな「力」を得ることにつながる。

そこで、私たちは、七区内の運動グループと、無所属の市議会議員を対象に「呼びかけ文」を送し、さらに電話で連絡をとった。その結果、後述する佐野氏（小金井市）、佐田氏（武蔵野市）などの協力を得ることができたのである。

マスコミに対する姿勢

昭和四十九年の参院選や昭和五十年の武蔵野市議選などを通じて学んだ、私たちのマスコミに対する一つの姿勢のようなものがある。それは、すべてのマスコミに対して、常に真摯な態度でぞむということである。

マスコミは、その背後に歴大な読者をかかえている。そして読者は、それを通じてさまざまな情報を読みとるだけでなく、ちょっとした情報の中から実際の姿を正確に読みとる力を身につけている。

私たちの伝えたいこと、都合のよいことだけを、スポークスマンのいかにカッコよく伝えようとしても、おそらくそのまま伝わりはしないだろう。また、インテキ情報をうまくマスコミに乗せようとしても、必ずどこかで本音がのぞき、それがどんなに小さな部分だとしても、受け手の側には、はっきりとウソが見えてしまう。と同時に、マスコミとの対応は、自分たちの運動がどうい

ものであるかを私たち自身が客観的に知るよい判断材料ともなる。それだけに、気の抜けないものなのであった。

ほんものであれば、必ず伝わる。一人の記者に平均五時間、長いときには十時間、話すというよりも、むしろ訴えるといったほうがいいような姿勢で、私たちは取材記者に対応した。初めは、洩洩候補的扱い、あるいは「話題提供者」的に私たちを見ていた記者の姿勢も、時がたつにつれて次第に真剣になってきた。

カンパ目標四百五十五万円

選挙とは金のかかるものだ、という常識がある。さらに、金をバラまけば票につながる、という意味のことが、あたりまえのことのように話されている現実がある。

たしかに、選挙には金がかかる。事務所を借りるにしても、ポスターを印刷するにしても、選挙カーを走らせるにしても、準備期間を含めてわずか二か月余りの支出とはいえ——二か月というのは、選挙の常識からすれば極端に短い期間なのだが——一サラリーマンの貯金程度では、とうていまかないきれぬものではない。

しかし、また、選挙とは、一般にいわれているほど金のかかるものではないともいえる。アルバイトの日給八千円にみられるような、べらぼうに高い人件費、見も知らぬ人に出されるハガキや電話の料金、それに大量の印刷物、広告費など、私たちが市民の感覚からすれば、まさに湯水のごとく金が使われている、という実感がある。ましてや、うわさされるような裏金が動いているとすれ

収支報告
 菅直人 選挙事務所
 11月27日現在
 キャン収入総額
 4,114,711円
 支出
 1,705,166円
に供託金 1,000,000円

毎日、街頭で収支報告をした。

しかし、結果的には、この予算はたいへんきつかった。昭和四十九年からの物価上昇率、特に郵便代と印刷代の値上がりをおもいにも計算に入れてなかったからである。

このようにして、なんとか予算は立ったものの、次に、どこからどのようにして金をかき集めるかという問題が残っていた。いくらカンパで集めるといっても、ただ黙って坐ってれば、ひとりでどんどん集まってくるという性質のものではない。ある程度の計画性と、それに応じた呼びかけが、不可欠である。

私たちの大ざっぱなカンパ計画は、およそ次の

るのだが……。

カンパ目標額、四百五十五万円。そのうち供託金の百万円などを除くと、選挙費用の総予算は、二百四十六万二千元。法定選挙費用千二百万円のうち約五分の一である。

予算を組むにあたっては、市川選挙の際の選挙費用収支報告がたいへん役に立った。費用項目は、その時と同じものにし、費用の見積りも、それとほぼ同様に計算した。違うのは、市川選の際には張らなかつたポスターの費用と、今回の選挙から認められることになったビラの費用が、印刷費に加算されたことぐらいである。

私たちの選挙予算一覧

単位千円

内 容		選挙費用	準備・残務費用
人 件 費	事務員2名	80	70
事務所賃借料	家賃・電話設置料 机のリース代等	130	100
通 信 費	電話代・切手代	750	110
交 通 費	ガソリン代・定期代他	132	52
印 刷 費	ポスター・ビラ・ハガキの 印刷	700	100
広 告 費	カンバン代金	10	—
事務用品費	地図・ノート・鉛筆・封筒 代、その他	50	70
食 糧 費	一食400円として	360	180
休 泊 費		50	—
雑 費	電気・ガス・水道料を含む	200	200
合 計		2462	812

『シビルミニマム』 昭51.10.20号 (第28号)

ば、なおさらである。「法定選挙費用ではとうてい間に合わない」ということがよくいわれるが、はたしてほんとうだろうか。

市川選挙では、法定費用の九分の二、武蔵野市議選では三分の一。選挙は法定費用の中で十分にやれる。これが、二度の選挙を経験した私たちの確信であった。もちろん、十分とはいっても、それはムダ使いをしないという条件つきでのことである。

「手作り・草の根選挙」を目指す私たちは、選挙費用もすべて運動への賛同者のカンパでまかなう。したがって、候補者自身は一銭も出す必要はないという仕組みになっている。もっとも、この選挙は、菅という候補者を推し出すためのものでなく、市民運動グループから新しい市民政治勢力を打ち立てようとする運動なのだから、候補者も当然運動の一員であり、その意味からすれば、候補者もカンパをすることはまったく当然ともいえ

ようなものであった。仲間うち（運動員）から百万円、私たち機関紙であるの『シビルミニマム』の購読者や、これまで交流のあった人々、グループなど、比較的近い部分から百五十万円、新聞などを見て、あるいは選挙中に知って、などという、選挙運動前にはまったく見知らぬ人から百万円、つきあいのある著名人から百万円、そして、大学祭での焼きソバ・オモチャ売りや、十月二十三日に予定されている「草の根千円パーティ」（56ページ参照）などから残り五万円、計四百五十五万円。

仲間うちはいとしても、他人や他グループには、私たちの趣旨を訴えると同時に、カンパをお願いする、次のような呼びかけ文を、ハガキなどで送ることにした。

ごぶさたしておりますが、お元気ですか。

49年参院選の際、市川房枝さんを勝手に推薦し運動に参加した私達青年グループはその後も「政治を市民の手に」と訴えて活動を続けております。

しかし、現在の政治状況は決して市民本位のものとは思えません。

そこで、政治を市民の手に取り戻すため、今回の総選挙に、全国各地で市民が選挙に立ち上がるようよびかけていますが、まだまだ大きな潮流にはなっておりません。

私達は、このよびかけを続けると同時に東京7区で菅直人さんを推薦、彼を候補者として市民選挙に立ち上がることにきめ、そのための政治団体を発足させました。

この政治団体は規約にもあります通り、今回の選挙に限ってのもですが、私達の運動が広く

支持をうけることができるならば、新しい政治勢力として成長していきたいと考えております。

私達はこの政治団体の目的を達成するため別表（50ページ参照）のような予算をたてました。

私達の運動は、いつものように手作りの草の根運動ですが、供託金の100万円をはじめどうしても必要と思われる費用が450万円にのびります。ひとりでも多くの方のご協力を得て、多数の市民の大きな運動にしたいと望んでいます。

同封致しました趣意書、候補者・グループ紹介、規約等をお読みいただき微意ご了解下さるようお願い致します。

一九七六年十月

あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会

代表 田上 等

〒180 武蔵野市境南町二の二七の五 プレジデント武蔵野一〇一

TEL 〇四二二一三二一六九〇三

なおカンパをお送りいただく場合には、振込先を銀行口座と郵便振替口座を留意致しましたのでご利用下さい。

〇銀行振込先 第一勧業銀行三鷹支店普通預金口座 二六五一―一三七九九―一四

〇郵便振替口座 東京 八一五五七九〇

なお本会へのカンパで一万円をこえる金額については、法律により寄附金控除（無税扱い）の対象になります。

このようにして、カンパを募ったものの、所詮、打つべき手を打ったあとは待つしかない身である。金が集まるかどうか、実際にはかなり不安であった。もし目標額に達し及ばなかったらとか、法定得票数を超えられずに供託金を没収されてしまったらとか——供託金は没収されないことを希望の前提としていた——さまざまな思いが胸中を駆けめぐり、最悪の場合にはどうするかも真剣に考えざるをえなかった。

まったく、金の心配ほど、無意味に神経を消耗するものはない。確実に集まるという保証は、仲間の誰にもなかった。

これは後日談になるが、選挙戦の中盤ごろ、周囲の反応が日増しによくなってきたにもかかわらず、カンパの合計が二百五十万円台でストップしたまま、約一週間、ほとんど動かないということがあった。このときの不安と、やっと三百万円に達したときの安堵感を察していただきたい。ともかく最終的には、目標を五十万円超えて、五百万円が集まった。

ゼロからのスタート

九月十五日の話し合いで、今回の衆院選をやることに決定はしたものの、一か月後の十月十五日まで、実態面では、ほとんど何も進展しなかったといつてよい。

まず「人間」、そして事務所。人間といえ、この間、新しいメンバーは、ほとんど参加していない。これは、この段階ではまだ、今回の選挙をなぜやるのかというイメージが固まっていなかったため、具体的に動くようにも、歯車が空まわりしていたせいだと思われる。実際に、新しい人が運

動に加わっても、すぐに出来る仕事というのが、この段階では、まだ用意できていなかった。

つまり、私たちの運動は、ほかの選挙組織とは運営の方向が逆向きなのである。ふつう、選挙をやろうとするとき、ほかのところならば、目的がはっきりしている。候補者を当選させるというところである。まず、人と金をできるだけ集める。ところが、私たちの場合は、まず最初に納得のいく目的のようなもの、何のために選挙をやるか、どのような方法でやるかを参加者全員が認めない限り、一歩も動けないところがある。これを趣意書などの形ではっきりと表わす、文章化するということがかかなりむずかしく、また一番、難渋するところでもある。

しかし、いったんできあがってしまえば、あとはそのイメージに沿って無限に仕事をつくれればよい。この、無限に仕事を作るというのが、私たちの特色の一つであり、それが運動の拡大へとつながるものだと思う。人も金も、大義名分さえ本物であれば、自然に集まってくるものだし、集まってきた人をつなぎとめるのは、その人々にできる仕事なのである。

今述べたような理由で、ほんとうに人間の参加が本格的になり始めたのは、事務所の態勢も整い、今回の選挙のイメージがメンバーの間で共有可能になり始めた十月下旬ぐらいからであった。しかし、十月二十三日の「草の根千円パーティー」によるデモンストレーション、大学での、学生に参加を呼びかけるピラマキなどを行なったにもかかわらず、選挙戦に突入するまで、なかなか人は増えず、実際に動いている人間にとっては気がかりな日々が続いた。

仕事の「場」である事務所の手当ても、スムーズにいったとはいえない。政治的な色彩の強い事務所は、それだけでなく借りにくいのに、今回のような選挙ともなると、商店街などの相互規制も

あり、それに借用期間が短いことも手伝ってますます借りにくくなる。しかも、私たちの運動は、お金ではなく多くの人の協力によって動くものだから、多勢の人が同時に仕事ができるようにある程度のスペースが必要になる。運動員の誰かの家の一室を仮事務所にし、という案もあったが、それは狭くて少々無理である。

事務所がそんな状態であっても、選挙準備はどんどん進行させなくては間に合わない。とりあえず市川氏主宰の「民主政治を立てなおす市民センター」に勤務中の田上等を選挙事務長と決めた。それ以降は、市民センターを連絡場所とし、中心となっていた田上、菅、片岡、朝倉らが、夕方、仕事が終わったあとに集まっては、物事を進行させていった。

さいわい、公示の一月前になって、私たちが小中学生相手の塾を開いていたマンションの隣の部屋を持ち主が、その部屋を借してくれることになった。

事務態勢の方は、十月十日、片岡の要請が功を奏して、藤本ふみ子（二十四歳・刺しゅう家）が事務所にはいることを同意、次いで佐藤淳（二十二歳・中央大生）が自発的に参加した。その後、十月二十日になって、田上は市民センターを辞職し、事務所の専従になった。

十月十四日夜、それまで私たちの運動の事務所であった渋谷プロジェクト・センターから物運び込み、一応の格好が整い、選挙事務所がスタートした。

草の根千円パーティ

草の根とは、一対一の関係を拡大していくことである。人と人のつながり、助けたい」とい

う気持ち、それを大切にしたい。草の根はしんどく、時間もかかるが、私たちはそれでいく。三万円を一人からもらうより、三十人から千円ずつもらうことをすばらしいと思い、私たちは草の根千円パーティを企画した。

私たちの今後とも展開する草の根運動に、皆様が参加されることを期待します。

（『シビルミニマム』第三〇号）

昭和五十一年十月二十三日、土曜日、午後六時三十分、東急吉祥寺店九階のレストランで「草の根千円パーティ」が始まった。



草の根千円パーティで、「政治を市民の手に」と呼びかけた。

田上代表による「市民選挙で政治をわれわれ市民の手に」という決意表明のあと、菅の立候補受諾演説、次いで全国サラリーマン同盟代表委員青木茂氏による推薦演説がつづいた。

この日の収入は、会費一人千円と参加者からのカンパも含め、しめて二十八万九千円。支出、九万二千九百円。その差額十九万六千九百円は、市民の会のカンパ収入とした。これをもって、ついにカンパ総額は百万円の大台をこえ、供託金をそろえることができた。

市川選挙との相似と相違

すでに述べたように私たちのグループは、市川房枝氏の「理想選挙」に参加したメンバーを母体として、四十九年参院選の総括パンフレットの中で、市川氏はこういつている。

根本的には、議会制民主主義を有権者の手に取り戻すという目的がある。有権者が自らの手で出したい候補者を捜し、立候補を頼み、金を持ちより自分達の手で選挙を行なう。だから推薦した方が主人公となり、候補者より真剣にやる選挙、そんな有権者の選挙が理想選挙だと思ふ。もちろん、立候補届け出を推薦制で行なうとか、金をかけないとか、法律が許しても好ましくないことはやらない、などという手続き論、技術論も、私の主張する理想選挙には不可欠だ

今回の私たちの選挙も、この理想選挙の条件はすべて満たしている。しかし、あえて「市民選挙」という言葉を使ったのは、市民政治勢力の拡大ということを念頭においたからであった。具体的には、政策よりも政治姿勢を前面に出した市川選の戦い方から、既成政党に対する本質的な対案となる主張を盛り込んだ選挙戦へ、さらに腐敗に対して単にこちらが清潔である、ということだけではなく、腐敗構造をたたきつぶし、私たちが自らの手で新しい参加型政治構造をつくり出すんだという志向を明らかにしたものだ。

もう一つの市川選との違いは、候補者の無名性であった。市川選では、多数の協力が得られるか、金が集まるかどうか、ということなど、誰も心配しなかったが、今回の場合は、候補者の無名

性ゆえに、まさにそれらのことが懸念された。

ともあれ、四十九年の参院選が「市川さんだからできた理想選挙だ」という声に対し、私たちの選挙が事実をもって、社会的に市民選挙のポテンシャルが存在しているのだということを明示しえたことは大きな収穫であった。